実践報告

タマサート大学における SEND プログラムの実践

—真正性を高めたビジネス日本語授業の取り組み—

佐藤　一央

要　旨

筆者は 2016 年度の秋学期に SEND プログラム[1]長期派遣者としてタイのタマサート大学に派遣され現地で日本語教育の実践に携わった。現地での活動はビジネス日本語を始め、文法、音声・発音や読解教材の改訂など多岐に渡った。ビジネス日本語では特に真正性を意識した課題を作成し、日系企業への就職活動を意識したエントリーシートやビジネス E メールの作成、敬語表現学習等の授業支援を行った。この授業を通して学生はビジネス場面での実際の言語使用を疑似体験し、現実の就職活動に結びつけた事例も見られた。一方、筆者にとっては国・地域により学生の仕事観・就業観は異なるという気付きが得られた。

キーワード

SEND プログラム　ビジネス日本語　真正性　エントリーシート　仕事観・就業観

1. はじめに

筆者は 2016 年度秋学期、タイのタマサート大学に SEND プログラム長期派遣者として派遣され現地で日本語教育の実践に携わる機会を得た。タマサート大学としては 2015 年に続き筆者が二人目の受入となったものである。筆者は長年に渡り企業に勤め、複数の国での駐在を経験し海外ビジネスに関わってきた。現地での活動はビジネス日本語を始め、文法、音声・発音の学習支援や読解教材の改訂など多岐に渡ったが、本稿ではビジネス日本語の教壇実習とティーチングアシスタント（TA）としての活動を報告する。

1.1　タイにおける日本語学習者の動向

国際交流基金の調査によれば、2015 年のタイでの日本語学習者は約 17 万人で前回 2012 年の調査から 34%と大幅に増加し学習者数は世界 6 位となった。背景には中等教育への日本語教育の導入が進んでいることに加え、タイと日本の経済関係の強さや、日本のポップカルチャーへの興味、日本観光のブームなどがあると言われている。

1.2　タマサート大学の概要

タマサート大学は 1937 年創立で現在 18 学部・6 大学院・研究所からなるタイでも有数の総合大学である。筆者が派遣された日本語学科は 1962 年に設立された教養学部の中に

あり 14 学科（内、外国語は日本語を含め 7 学科）を有している。日本語学科は 1 学年 50 名の定員で高校での日本語既習・未習割合はほぼ半分である。主専攻の学生に加え、他学科の学生が副専攻として日本語を学んでいる。

2.　活動報告

2.1　授業シラバスと履修者プロフィール

日本語学科の講義要項によれば「ビジネス日本語」の授業シラバスは次の通りである。①日本語ビジネス場面で必要となる基本的なマナーを学ぶ。②ビジネス場面における適切な敬意表現を身につける。③オフィスでよく使われる会話を練習する。④就職の際に必要な提出書類の書き方を学ぶ。（エントリーシート）⑤日系企業についての理解を深める。日本語科学生の日本語レベルは JLPT の N2 レベルが多く、日本への留学経験者は履修者 34 名中 22 名でクラスの 6 割を超える。履修者の大半は就職を控えた 4 年生である。授業は 90 分で同一授業を 2 コマ行った。

2.2　ビジネス日本語「エントリーシートを書く」　授業実施からフィードバックまで

2.2.1　授業（9 月 13 日）

エントリーシートを書くといってもいきなり書けるものではない。そのためまず「就職」ということの意味を考えるために、これまでのアルバイト、インターン経験を振り返ることから始めた。次いでエントリーシートの学生と企業、双方にとっての位置付けを考え自己分析の時間を取った。自己分析は学生時代に最も打ち込んだことは何か、最も苦労したことは何か、それをどのように乗り越えたのかといった点をワークシートに記入した。また、5, 6 名をグループとし各メンバーの良いと思われる点を 2 つ以上挙げてもらい客観的に自分の強みを把握するようにした。就職を考える際の最も重要な点の一つは各人の仕事観を醸成することである。どんな仕事をしたいのか、仕事を通して実現したいことは何か、自分が学んできた専門はどのような分野で役に立つのか等をワークシートに書き込んだ。次に実際にエントリーシートを書く際に役に立つ「積極性がある」「主体性がある」「向上心がある」等の日本語表現を学習した。

2.2.2　エントリーシートの提出からフィードバックまで（10 月 14 日から 11 月 22 日）

エントリーシートの記入項目は次の 3 点である。①大学時代に最も真剣に取り組んできたことは何ですか。②当社を志望した理由は何ですか。③入社後どのような仕事に取り組みたいですか。これらの項目を夫々400 字以内で記入することとしたが、300 字以上書いている者から 100 字程度しか書けていない者までばらつきが大きかった。個人別フィードバックは記入されたエントリーシートの内容、構成、文法・語彙の観点から行った。ほとんどの学生にとってエントリーシートを書くことは初めての経験である。作成にかかった時間は後日のアンケートによれば 3 時間から 5 時間という回答が多かった。以下は実際に記入された個人別フィードバックシートの例である。

表 1　個人別フィードバックシート

氏名：xxxxxx　　2016 年 11 月 XX 日

内　容	真剣に勉強に取り組み留学を実現するために苦手科目に取り組んだストーリーは、具体的な数値（成績）とともにわかり易く書かれていて大変良い。「辛い状況下でも自分に合ったやり方を見つけ努力する」コツコツ努力型はどの企業にも求められる基本能力であり、そのことが入社後の組織の中でどのように活かせるのかが書けると更に良い。
構　成	字数の指示がある場合は 80%～90%以上書くように努めること。就職希望の企業を更に研究し、その企業で働いている自分を想像できるともう少し具体的に書くことができる。3 年後、5 年後にどう成長していきたいのか、時間軸に沿って自分の成長ストーリーを書けるようになると更に良い。
文法・語彙	特にミスはないが、ビジネス文書として適切な敬語表現（「御社」や「～おります」が使えるようになると更に良くなる。

「大学時代に最も真剣に取り組んできたことは何ですか。」という問いには学業やアルバイト経験を書いたものが多かったが、それが企業に入ってからどのように役立つかという観点で書いている学生はほとんどいなかった。また、「入社後どのような仕事に取り組みたいですか。」という質問に対しては日本語学科の学生らしく通訳と書いた者も多くいたが、企業の採用担当としては単に入社時の希望業務を書くだけでなく、中期的な時間軸でのありたい姿を書いてほしいと思うのではないか。メーカーでの通訳希望者には「3 年後には製造部門全般の通訳、また 5 年後には重要な会議や商談の場面で活躍できる通訳人材といった成長ストーリーが書けると良い」とコメントした。その際、必ず良かった点と改善を要する点を併記するよう心掛けた。このフィードバックシートを 11 月の授業で学生に手渡すと同時に、口頭でも補足説明を行った。

2.3　ビジネス日本語「E メール・敬語」

企業内の E メール使用が日常化するにつれ、従来の電話場面は相対的に減りつつある。このような状況を踏まえビジネス日本語授業でも E メールの書き方や実践的な敬語表現を取り入れている。筆者はタイ人教師の TA として 4 回に渡り授業支援を行った。

2.3.1　E メール

表 2　E メール課題

	社内向け	社外向け
1 回目	テーマ「会議案内」 新人事制度説明会	テーマ「帰国挨拶」 取引先への退職挨拶
2 回目	テーマ「報告・連絡・相談」 プロジェクト進捗報告	テーマ　「アポイントを取る」 システム開発状況ご報告

1 回目、2 回目とも社内向けと社外向けのメール作成を課題とし、問題作成と添削・評価を行った。1 回の授業（90 分）で 2 問のメールを作成する。辞書は持込可である。

【フィードバック例】E メールのタイトルを「お知らせ」や単に「会議案内」としている回答が多くみられたが、企業での管理職となると毎日 50〜100 通以上のメールを受け取ることも珍しくなく、タイトルを見ただけで何の用件かがわかるのが望ましい。加えて、ウチとソト、上下関係を理解した敬語の使用、簡潔さ、依頼する場合は丁寧にかつ適確な指示でといった点は外せない。一方で、定型文を覚えてしまえば済んでしまうところもある。これらの点をタイ人教師へフィードバックを行い、教師から学生へ説明を行った。

2.3.2　敬語（口頭表現）

表 3　敬語課題

	場面 1	場面 2
1 回目	「採用面接」 採用担当者との面接場面	「取引先との電話応対」 担当者不在時の応対場面
2 回目	「送別会」 上司の退職送別会での司会	「ホテルでのインターンシップ」 チェックイン時の予約ミス応対

E メール同様、1 回の授業で 2 問に解答する。問題には会話のダイアログが書いてあるが、それを場面に応じて適切な敬語表現に直していく問題である。辞書は持込可である。

【フィードバック例】サービス業で使われる敬語、特にホテルでは一般の会社場面とは異なり、その使用に関して更に十分な注意が必要である。「ございます」の使用が望ましいことや誤用例では「お」と「ご」の混同が見られた。「送別会」場面では司会が、「〇〇部長はよくがんばりました」と書いている解答例も多くあったが上司に対しては不適切であることなどタイ人教師へその旨フィードバックを行い、教師から学生へ説明を行った。

2.4　実践活動から得たこと・気付き

筆者は上述の課題作成に際しビジネス日本語の市販教材を参考にしようとしたが、真正性という点から違和感を覚える内容が多かった。向山（2016）は「ビジネス場面での言語使用は就業経験のない学習者にとっては未知の領域である」とした上で、「実際のビジネス場面で起こる可能性のある状況を設定した真正性の高いタスクによって、ビジネス場面での言語使用を疑似体験させることができる」（p.105）と述べている。作成した問題は全て筆者が実際に体験した場面に基づいている。魅力的なエントリーシートを書くことは日本の大学生でも難しい。そのためにもまずは仕事観・就業観を考えることに取り組んだが、筆者にとってはその土地、その国で仕事観・就業観は異なるという気付きも得られた。滞在中、実際にシンガポールで開かれた日系企業の就職フェアに参加しその相談に来てくれた学生もおり、授業と現実の就職活動が結びついた例となった。

3. おわりに

3.1 派遣前目標をふり返って

今回の派遣に際し設定していた筆者の課題であるが、ミクロの観点では第一にタマサートでのシラバス、カリキュラムについて理解すること。第二に教師の教育観に関しインタビューを通して教師のことを知り課題の発見をすること。第三に学習者の学習観、学習動機、学習行動・スタイル等、学習者のことを知り課題の発見をすること。最後に学習環境、学習リソース、教材、施設・設備等を見ることで教室のことを知り課題の発見をすることであった。他方、マクロの観点では第一にタイでの日本語学習者増加の要因である中等教育の現状を知ること。第二に日系企業の日本語教育に対する期待は何かを把握することであった。多岐に渡る実践活動を通じて概ね理解することができたと感じている。

3.2 筆者にとっての SEND プログラムの意義

ここ数年タイの学習者数の伸びは著しく、この勢いのある地域に従前より関心を抱いていた。このプログラムにより海外の大学で日本語教育に携わる具体的なイメージを持つことができ、海外での日本語母語話者に対する期待の大きさを感じると同時にタイ人教師と日本人教師の夫々の役割をも考える契機となった。バンコクという多言語環境下で日本語を教え、そして学ぶ多くの人たちを間近に見ることで、筆者自身の研究テーマにも新たな視座が加わった。タマサート大学の先生方からは、これまでの取り組みで派遣留学生の受入ノウハウも蓄積されたことから、これからの更なる展開を望む声が聞かれた。SEND プログラム自体は今回で終了となるが、これまでの成果をベースにした大学間のネットワークが今後も継続しタマサート大学と早稲田大学の交流が更に深まることを期待したい。

謝辞

今回このように大変貴重な機会を与えていただきました日本語教育研究科の先生方、SEND 事務局の皆様、尚友倶楽部様、そして何よりも筆者を暖かく迎えていただいたタマサート大学の先生方、日本語学科の学生の皆さんに改めて感謝申し上げます。

注

1 SEND（Student Exchange Nippon Discovery）プログラムとは早稲田大学日本語教育研究科と日本語教育研究センターが主体となり「大学の世界展開力強化事業（ASEAN 諸国との大学間交流形成支援）」に採択されたプログラムである。詳しくは次の URL を参照されたい。
＜http://send-waseda.jp/＞（2017 年 5 月 31 日閲覧）

参考文献

国際交流基金【2015 年度「海外日本語教育機関調査」結果（速報）】2016/11/10
向山陽子（2016）「真正性を高めたタスク教材を用いた指導の効果―ビジネスメール・ビジネス文書作成に焦点を当てて―」『日本語教育』164 号、pp.94-108

（さとう　いつお　早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）